

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 24 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593230

研究課題名(和文) 臨床実践内容に基づく基礎看護技術教育におけるスキンケア技術教育の検討

研究課題名(英文) Study of the skin care technical education in the basic nursing technical education based on clinical practice contents

研究代表者

田中 結華 (Tanaka, Yuka)

摂南大学・看護学部・教授

研究者番号：80236645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：基礎看護教育の基礎看護技術教育におけるスキンケア技術を、臨床実践内容に基づいて再検討する目的で本研究を実施した。文献検討および学会のガイドラインを収集して調査表を作成し、スキンケア技術を含む実際の看護場面の参加観察および協力者のインタビューを実施し、参加観察内容のフィールドノート、およびインタビューの逐語録より分析した。現在5名の対象者より計20場面を参加観察し、その結果を検討中である。

研究成果の概要(英文)：I carried out this study for the purpose of reexamining a skin care technology in the basic nursing technical education of the basic nursing education based on clinical practice contents. I collected the guidelines on documents examination and congress and made a questionnaire and carried out the participation observation of the real nursing scene including the skin care technology and the interview of the cooperater and analyzed it than a word for word record of the field notebook of participation observation contents and the interview.

研究分野：基礎看護学

キーワード：スキンケア 教育 患者中心

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

国内・国外の研究動向及び位置づけ

今日、基礎看護教育における基礎看護技術教育では、皮膚統合性障害を予防し、皮膚を健やかに保つスキンケアについて系統的に教授する内容を十分に検討し、構築するには至っていない。「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」に基礎看護技術が定められてから約 20 年が経過している。しかし、現在の保健医療の場では、高度医療への対応、生活や予防的視点の視点から看護を展開する能力が求められている(厚生労働省, 2008)が、技術を実践する現場で実践されている技術をもとにした研究は少ない。過去に研究代表者らが実際の看護行為に関連づけて基礎看護技術の検討を行ない(研究代表者: 小笠原知枝, 研究課題番号 07672523)(田中ら, 1998)(久米ら, 1998)(辻ら, 1999)、従来の基礎看護技術教育内容の枠組みに加え、さらに安全・安楽に関連する技術が普遍的に行われていることが検討されている。しかし、その後の医療および看護技術の発展に基づく検討はほとんどなく、文献に基づいた検討が中心である(高橋ら, 2001)(服部ら, 2011)。

一方で、臨床看護実践として行われている看護技術の中で、皮膚・排泄ケアに関連したスキンケア技術の向上がめざましい。これらは認定看護師として皮膚・排泄ケア認定看護師が活躍する中で、臨床実践の質を高めてきた結果であると考えられる。そして現場におけるスキンケアに関連する褥瘡、フットケアをはじめ、クリティカルケアや排泄に関連する皮膚障害などの問題が取り上げられる傾向にある(三富ら, 2007)(小玉ら, 2004)(益田ら, 2009)。また、スキンケアは皮膚を健康に保つため技術であるが、感染を防ぎ、外観を保ち、対象者のコミュニケーションを助け、自尊感情を保つといった、全人的な支援とも関連づけられる(田中, 2006)。看護の本質にかかわるこうした技術の構造と意義を現場の実践内容の中から明らかにすることについての検討はまだ行われていない。

こうした現場の問題やそれらに対応する看護実践の内容を反映した本研究の目的は、臨床看護実践で行われている技術を各行為ごとに実際の場面を観察し、合わせて実施者からその行為の意味付けを聞き取ることによって、実際に行われているスキンケア技術およびスキンケア技術に関連づけられた技術を包括的に明らかにし、基礎看護技術教育におけるスキンケア技術教育の構造および内容について検討する必要があると考える。

応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

研究代表者は平成 3 年より基礎看護技術の教育に従事し、現在に至っている。過去に

研究代表者らが実際の看護行為に関連づけて基礎看護技術の検討を行った(田中ら, 1998)(久米ら, 1998)(辻ら, 1999)が、従来の基礎看護技術教育内容の枠組みに加え、さらに安全・安楽に関連する技術が普遍的に行われていることが検討された。

並行して褥瘡予防に関連する研究、高齢の褥瘡保有者において血中亜鉛などの微量元素の不足に関する検証を行ってきた。また、皮膚統合性障害に対する技術を発展させるためストーマケアにも取り組み、様々な検証も行ってきた。褥瘡予防やストーマケアにおける皮膚障害については、様々なエビデンスに基づきその技術が明らかになり、臨床実践に反映されてきたが、看護者がその内容に触れて実践を展開できるのは卒後が中心であり、ほとんど基礎看護技術内容には反映されていない。

また、現在並行して「クリティカルケア領域における特徴的な皮膚障害の発生要因およびケア内容の検討」(研究課題番号 22592453、研究代表者: 石澤美保子、研究分担者: 田中結華)にも取り組んでおり、現場で必要とされるケア内容と関連づけて基礎看護教育の内容を発展させる必要性を痛感したことも、着想に至った経緯の一つである。

(2) 研究期間内に明らかにする内容

医療の現場で行われている、スタッフナースの実践を観察してスキンケアおよびスキンケアに関連している看護行為を収集し、事後のインタビューを通してその看護行為に対する思考を明らかにする。

で収集した看護行為を質的帰納的分析およびテキストマイニングを併用して分析し、スキンケア技術の構造に関する仮説を見いだす。

の仮説に基づいて作成した質問紙を用いた調査によって、スキンケア技術とその関連する技術の構造を明らかにする。

上記の結果をもとに、スキンケア技術を系統化し、今後の基礎看護技術におけるスキンケア技術の教育内容を検討し、臨床実践内容に基づいた新しいスキンケア技術教育を提言する。

(3) 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点および予測される結果と意義 <本研究の特色・独創的な点>

本研究の特色は、技術教育の内容を臨床実践における実際の看護行為から帰納的に検討する点にある。さらに、参加観察法と面接法を組み合わせることにより、より包括かつ適格にとらえ、単なるテクニックの収集ではなく、ケアの意義付けや必要な根拠も包括し、看護の他の技術、人間関係や心理的サポートなどの技術と結びつけた全人的な援助技術としての側面を明らかにできる。

< 予測される結果と意義 >

本研究は、局所のケアとしてとらえられがちなスキンケアを、全人的な援助としてとらえ直し、看護技術の本質に迫るものである。基礎看護教育では、単なる方法論ではなく、技術を通して看護の本質を体現できるよう、教育内容を検討し直すことにつながる。また、長らく伝統的な構造で教授されていたスキンケア技術教育をアップデートするための資料とできる。今日の臨床実践に即した看護技術の技を教授することにより、現場と看護基礎教育とのギャップを埋め、卒後のリアリティショックを軽減し、卒後の新人看護師の成長を促し、現場への適応を高めることに貢献できると考える。

2. 研究の目的

臨床看護実践におけるスキンケア技術の向上がめざましい。一方で基礎看護教育における基礎看護技術教育では、皮膚統合性障害を予防し、皮膚を健やかに保つスキンケアは、身体の清潔、褥瘡予防、感染予防などの技術が関連するが、スキンケアそのものを看護技術として教授するための系統的な教育内容を構築するには至っていない。本研究の目的は、臨床看護実践で行われている技術を各行為ごとに実際の場面を観察し、合わせて実施者からその行為の意味付けを聞き取ることによって、実際に行われているスキンケア技術およびスキンケア技術に関連づけられた技術を明らかにし、今後の基礎看護技術教育におけるスキンケア技術教育の構造および内容について検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象は、研究協力を得られた約5施設の100床以上の医療機関の中堅以上のスタッフナース約20名とする。1 医療施設の対象者は異なる部署の看護師となるよう、協力施設に依頼する。調査方法は、スキンケアおよびスキンケア技術を含むと対象者が考える看護場면을対象者1名あたり約2~3場면을観察し、観察記録を作成する。調査にあたっては、中澤の方法(中澤ら, 1997)の方法に基づき、参考文献および皮膚・排泄ケア認定看護師の協力を得てカテゴリーおよび記述フォーマットを作成の上、予備観察による検討と観察者の訓練を経て行う。対象者はあわせて事後にインタビューを行い、各々の看護行為についての実施時の思考を聞き取り、逐語録を作成する。各看護場面の観察記録とインタビューの逐語録を統合して質的帰納的に分析およびテキストマイニングによる分析により、スキンケア技術の構造に関する仮説を見いだす。

(2) 得られた仮説にもとづき、スキンケア技術、およびスキンケア関連技術の実施頻度、

および主観的な重要性を問う質問紙を作成し、協力の得られる100床以上の医療機関に所属する約300名の看護師に郵送にて質問紙を配付して回収する。対象者の部署はできるだけ分散するようデータは共分散構造分析などの手法を用いてモデル化を行う。

(3) 前年度までの質問紙調査の結果得られたモデル、および平成24年度の参加観察によって得られた仮説を統合し、皮膚・排泄ケア認定看護師と看護技術教育の専門家会議によってさらに多面的に検討し、スキンケア技術およびスキンケア関連技術の構造および内容について明らかにする。さらに、基礎看護技術教育内容への活用について検討し、提言をまとめ学会などの場で発表する。

4. 研究成果

[平成24年度]

スタッフナースの実際の看護行為について、参加観察およびインタビューから仮説生成を行うための準備を行った。実際に調査を行うために、文献検討および情報収集を、日本がん看護学会、日本創傷・オストミー・失禁管理学会等、スキンケア技術を取り扱う学会等、また、研究者との情報交換も行った。その結果、臨床の実践面では、スキンケア技術がかなり広範に日常の看護援助の中で行われているが、現場による格差も大きく、内容も多様であることが分かった。一方で、基礎看護技術教育での教育内容を、全国で用いられている基礎看護技術関係の各テキストや日本看護教育学会誌等、教育関係の文献から抽出し、検討する作業を行った。その中で、身体の清潔の一部としてスキンケアおよびその基盤となる知識を組み入れているが、独立した章としてはほとんど取り扱われていないことが解った。また、皮膚の機能に注目したスキンケア用品の使用や、医療用テープなど普遍的に用いられている医療用品の取扱については、記述が少ないことが解った。

一方で、参加観察による調査の準備として、調査場面にてより精密に技術実践を捉える必要があると考えた。そのため、現在の教育内容および実践内容における予測されるデータをコード化する作業を併行して行い、予備的な検討を進捗させている。また、研究協力施設のスペシャリストと共同検討を予備的に行ない、現在、各関係施設に提出する倫理審査の準備を整えた。また、参加観察のためのトレーニングを実施した。

[平成25年度]

平成24年度の成果を踏まえ、文献検討をまとめた。また、参加観察による調査の計画を作成し、倫理審査の手続きを行った。数病院に依頼するよう計画を行った。

[平成26年度]

平成26年度は参加観察による調査を行うため、具体的計画を作成し、本学の医療倫理

審査委員会の審査をうけ、一部修正の上了承された。数病院に依頼し、調査を依頼した。調査にあたっては、日本褥瘡学会、日本創傷・オストミー・失禁学会などで新しく検討された、医療関連機器圧迫創傷、スキンテアなどの概念を組み込んで、参加観察を行う視点を検討し、研究者間で討議した。特に、医療関連機器圧迫創傷については、教育内容にどのように含まれているかの文献を収集し、参加観察時に重点を置くための根拠についてまとめた。また、スキンテアについては、老年看護学分野での今後重要な概念となると考え、文献を収集し検討をした。その結果を観察時の視点として、調査に組み入れることとした。

また、参加観察法については、準備として実際のスキンケア実践を行っているスタッフ等から状況を聴き取り、再度留意点を洗い出しを行った。特に、今回は病院での実践を対象としているが、地域包括ケアへの以降を踏まえ、単に手順の実践というだけでなく、看護師-看護師間、看護師-他の専門職、および患者、家族への説明や、調整などもスキンケア技術の内容の一部であり、このような点の実践についても参加観察の視点としてふくめていく根拠をまとめた。これらの内容を参加観察の内容に含め、概念や調査項目を整理した。

一方、今後の検討のため、教育内容の収集も継続して実施した。

[平成27年度]

平成27年度に、調査実施にあたり、研究期間延長のため、8月に本学の医療研究倫理審査委員会の再審査を受け、11月に研究の承認を得た。書類等準備の上、2月に研究協力を得た1病院から5名の病棟で臨床実践を行う看護師の紹介を受け、それぞれスキンケア技術を含む看護場面の参加観察を行った。その結果、約20場面のフィールドノートと、事後に研究協力者5名より1名平均10分程度のインタビューを実施した。現在、それぞれのフィールドノートとインタビューデータによる逐語録を整理し、それらを統合して分析を行なった。その結果、臨床実践は、基本的なスキンケアに関する仮説を得た。ナースが患者に直接行う技術と、ナースおよび医療専門家が連携して行うための技術の2つの枠組みに整理できることが示唆された。基礎看護学教育においては、これらを含めてどのように実践と連携を組み入れて行くことが必要であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

発表については準備中である。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 結華 (TANAKA, YUKA)
摂南大学・看護学部・教授

研究者番号：80236645

(2) 研究分担者

石澤 美保子 (ISHIZAWA, MIHOKO)
奈良県立医科大学・医学部・教授
研究者番号：10458078

森木 ゆう子 (MORIKI, YUKO)
摂南大学・看護学部・講師
研究者番号：70374163

中山 由美 (平野由美) (NAKAYAMA (HIRANO), YUMI)

摂南大学・看護学部・講師
研究者番号：90346239

岡田 純子 (OKADA, JUNKO)
摂南大学・看護学部・助教
研究者番号：70374163

田丸 朋子 (TAMARU, TOMOKO)
摂南大学・看護学部・助教
研究者番号：0063940

宇田 賀津 (UDA, KAZU)
摂南大学・看護学部・助教
研究者番号：00636102

松田 常美 (MATSUDA, TSUNEMI)
甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師

研究者番号：90636119

(3) 連携研究者

なし

【文献】

厚生労働省(2008):看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理。

田中結華他(1998):基礎看護技術教育における実際の看護行為に関連づけた生活援助技術領域の指導法の検討、大阪大学看護学雑誌, 4(1), pp.6-15.

久米弥寿子他(1998):基礎看護学における看護技術の指導法の検討 - 問題解決技術領域の指導法大阪大学看護学雑誌 4(1) pp.16-26.
辻聡子(1999):基礎看護教育における治療関連技術領域の指導法の検討、大阪大学看護学雑誌 5(1) pp.17-24.

日本看護協会認定看護師制度委員会創傷ケア基準検討会(2002):スキンケアガイドンス、日本看護協会出版会、東京。

高橋有里(2001):医療の進歩と看護ニーズの変化に対応する「基礎看護学」の教育内容の検討 基礎看護技術科目の分析から、岩手県立大学看護学部紀要, 3, pp.113-120.

服部容子他(2011):看護実践能力を高める基礎看護技術教育内容の検討(その1) 教授内

容の精選と構造化の試み,甲南女子大学研究
紀要(看護学・リハビリテーション学編)、5、
pp.149-156.

三富陽子(2007):手術室の褥瘡予防, 文光堂、
東京、70-74.

小玉玉子他(2004):大学病院における術後褥
瘡患者の発生頻度と発生要因の検討、日褥瘡
会誌、6(1)、107-110.

益田淑恵他(2009):集中治療室における食事
摂取内容・亜鉛摂取量と創治癒状況との関連、
日褥瘡会誌、8(2)、133-139.

田中結華(2001):生活援助技術、看護理論
- 理論と実践のリンクージ - 看護研究の成
果に基づく理論を实践しよう、松木光子他編、
東京、ヌーヴェルヒロカワ、pp.173 ~ 183